

19	安城	錦町小学校	カワイ ユウカ 名前 河合 優花
----	----	-------	---------------------

分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）
-------	---	------	-------------

1 主題設定の理由

本学級の児童は、授業では前向きに取り組み、興味をもったことには、休み時間や家でも調べる児童もいる。また、問いかけに対しても真剣に考え、それぞれ考えたことを、つぶやく姿がある。しかし、相手の考えを聞くことができても、自分の考えに取り入れようとするのが難しい。自分の考えを伝えることに精一杯になってしまい、寄り添いながら聞こうとする意識をもつことが難しい様子である。そのため多様な意見が出ると期待してグループ学習を行っても、深い学びにつながらないことが多い。

以上の理由から、本研究では「相手の考えに寄り添い、自分の考えを深めていくことのできる児童の育成」を主題とした。そして、国語科の授業において、言葉に注目し、自分の言葉に対して客観的な考えをもらう場を設定し、単元名を「発見！発信！和の文化の『宝物』－和の文化を発信しよう－」として実践することで、主題に迫ることをねらいとした。

2 研究主題

相手の考えに寄り添い、自分の考えを深めていくことのできる児童の育成

－５年生国語科「発見！発信！和の文化の宝物－和の文化を発信しよう－」の実践を通して－

3 研究成果の概要

研究の仮説と手立て

仮説1

和の文化に親しむ体験の場を設定すれば、子どもたちは自分から調べる意欲が高まり、自分事として捉えることができるだろう。

〈仮説1に対する手立て〉

手立て① 和の文化に親しむことができる陶芸や紙すき体験を行うとともに、和菓子の試食などの体験活動をする中で、体験との出会いを大切にできるような言葉かけをする。

仮説2

互いの考えに対して、多様な考えを出し合っている話し合いを取り上げ、全体に広げれば、自分とは異なる考えへの抵抗が減り、相手の考えに寄り添いながら受け入れることにつながるだろう。

〈仮説2に対する手立て〉

手立て② 相手へ発信する言葉だけでなく、言葉と親しむ機会を設ける。

手立て③ 意図的なグループで和の文化の魅力が伝わる言葉を共有する。

手立て④ 考えがうまくまとまらず悩む児童や、言葉の組み合わせに困る児童の困り感に対して、話し合いの視点に注目している児童や、多様な考えを受け入れ、自分の考えに生かしている児童を出会わせる。

仮説3

作成したポスターを評価し合う活動を取り入れれば、自分の考えが相手にどのように伝わったのか考え、相手の受け取り方が様々であることに気付き、受け止める気持ちをもって自分の考えと向き合うことができるだろう。

〈仮説3に対する手立て〉

手立て⑤ 自分の考えた言葉の組み合わせについてレーダーチャートにして自分なりの評価をした後に、相手からの評価を聞いて、客観的な意見をもらう場を設定する。

これらの手立てを用いて、5年竹組27名を研究対象とし、検証した。

4 研究のまとめ

(1) 和の文化に親しむことができる陶芸や紙すき体験を行うとともに、和菓子の試食などの体験活動をする中で、体験との出会いを大切にできるような言葉かけをする。(手立て①)

児童が和の文化に親しみ、興味をもつことができるように、体験活動を多く取り入れた導入や、教科横断的に「和」について考える機会を設けた(資料1)。いきなり、和の文化と親しむ機会を得るのではなく前单元にある「和の文化を受けつぐー和菓子をさぐるー」で興味を少しもった段階で、児童の「和菓子を食べてみたい。」といった声から、体験を提案した。すると普段は和菓子を苦手として食べないでいる児童が、職人の技で出来上がった和菓子の見た目、そして気になる味を体験してみたいと思い、残すことなく、大切に味わう姿があった。普段から、何気なく見ていた和菓子が、その児童にとっては、ただの和菓子でなく、和の文化で受け継がれてきたものだと分かったからこそ、食べようという気持ちになったのではないかと考えられる。次の体験では、図画工作科でお皿作りを行った。まず初めに、自分のお皿のイメージを描いた。みんなの想像するお皿に類似したお皿の画像を提示した。すると、児童は想像を膨らませ、自分の下書きしたイメージ通りのお皿を作ろうとするが、実際に粘土を扱うのは難しく、苦戦している様子であった。また、柄も加えて付けたいという思いがあったが、難しさを感じ断念する姿も見られた。しかしがんばって作りあげたこともあり、完成するお皿を楽しみに、焼きあがるのがいつか尋ねてくる児童もいた。実際に制作することを通して、柄のよさについて考えていた。このことから、着物の柄に注目することにもつながった。作り終えて、難しかったと話す児童もいたことから、イメージしていたお皿になったかと問いかけると、「職人が作っているようなつるつるしたお皿にはなかった。」と話したことから、難しさを実感し、職人の技の細かさやすごさを確認することができた。次に、身近で毎日利用する再生紙を使い、紙すき体験をした。体験では紙をつくることの難しさを感じている姿が多くあった。完成したと思ったら、紙のもととなる液体を、均一にならすことができていなかったものもあり、穴の空いている紙や、でこぼこしている紙が出来上がった。作った紙にうれしそうに鉛筆で書こうとするが、いつも授業で使う紙のようにすると書けないことに曇った表情をする様子もあった。薄くて書きやすい紙を作るまでには相応の技術が必要であることに気づくことができた。最後に、和ろうそくと、よく目にする西洋ろうそくの灯る様子を比べた。比べた際に、「太い」「長く灯る」など、ろうそくの違いをつぶやく様子から、和ろうそくならではのよさを感じることができたことが分かった。児童の振り返りには、和の文化を受け継ぐためにはどのようにしたらよいかと考える記述があった。全体での話し合いの結果、受け継ぐためには、多くの人に伝えることが必要と考え、ポスターを作り呼びかけることとした。



和菓子を食べる



紙すき体験



和ろうそく

【資料 1 和の文化に親しむ児童の様子】

(2) 相手へ発信する言葉だけでなく、言葉と親しむ機会を設ける。(手立て②)

言葉と向き合う場の設定として、テーマに合わせたキャッチコピーを作る「キャッチコピー選手権」を行った。5月から毎月1回実施した。初めは、キャッチコピーとは何か分からない様子であったことから、なじみのあるCMの言葉を提示し、キャッチコピーとは何か考える場を設定した。児童は、CMの言葉を見て、「短い」「まとまりがある」「気になる」と発言した。このことにより、相手にとって、気になる言葉とは何か考えることへとつながった。短い言葉で自分の思いを相手の目を引くように書くことを意識することができた。同じテーマでも、自分の思いつかない言葉でグループの児童が言葉を組み合わせ合っていることに注目する様子も見られた。そんな児童の姿が多く見られるようになったのは、一学期に行った単元「安城市の魅力タウン誌を作ろう」がきっかけである。今までは、一つのテーマに向かってそれぞれで考えて個々で言葉と向き合っていたが、この単元では、学級全体で、一つのタウン誌のキャッチコピーと向き合うこととした。全体で、安城市の魅力を伝えるには、どのような方法があるか考える中で、一度は見かけたことのあるタウン誌を自分たちで作ることとした。安城市の魅力集めをするために、アンフォーレや安城駅付近を見て歩く機会を設けた。せっかく書くからには、より多くの人に手に取ってもらえるタウン誌としたい。そう思う児童が多くいたことが、ノートの振り返りの「たくさんの人に見てもらって、知ってもらいたい。」という言葉から見られた。どのようにしたらたくさんの人に見てもらえるかと考えていく中で、手に取りたくなるようなタウン誌は「表紙が大事だと思う」と話す児童や、「中に何が書かれているのかすぐ分かるような表紙がいいね」「何が書いてあるか、気になるのがいいんじゃないのかな」と考えを巡らせていた。迷っている児童に、タウン誌を実際に見たことがあるか問いかけると、自分たちの手元に届くタウン誌は実際にどんな言葉を使って、表紙を作っているのだろうと気になっている様子であった。実際にいろいろな市町を紹介するタウン誌を見比べると、目を引くキャッチコピーの存在に気付くことができた。児童は授業の中で、「キャッチコピーの名作を調べてみたら、普通の言葉じゃなくて、意味分かん。なんでだろう。すごそうな言葉があった。」とつぶやいた。家で見つけたタウン誌を持ってきて、比べている児童の姿もあった。キャッチコピーを考えるにあたって、学級全体で安城市の魅力の言葉出しを行った。多数決で決めるのではなく、納得いくまで考えて、竹組のキャッチコピーを完成するよう伝えることで、それぞれの考えを取り入れて、一つのキャッチコピーを作り上げようとした。相手の考えを聞きながら、相手も納得する言葉を考え、組み合わせ合っていた。全体に自分の考えを伝えることができるように、①個人で考える。②グループで考える③全体で考える、この三つのステップを踏んで考えた。③で話し合う中で、なかなか考えがまとまらず、困っている様子であった。話し合う中で、どのようにしたら全体での話し合いが進むのかも含めて考えるように伝え、「1回グループで今の考えを整理してから、全体で話し合いたいです。」と発言した児童がいた。その児童のアイデアに周りは頷き、グループで考えることとした。その後、全体で

話し合うことになったとき、グループごとに考えた、入れたいワードを持ち寄って、初めの全体での話し合いよりも視点を絞って話し合いが進められた。話し合いの中で多く出てきたのは、「社会で安城市の七夕祭りは日本の中でも有名と学んだから伝えたい」という気持ちであった。児童が、七夕まつりのことを「願いの町」と表現して入れることで、気になった人が「願いの町？」と興味をもってくれたらいいなと考えたことが話し合いの様子から分かった。完成した5年竹組のタウン誌は、安城市の観光案内所で掲示してもらえるよう、代表の児童が願いの電話をかけ、掲示してもらえることとなった。自分たちの作ったものが、実際に見てもらえるかもしれないという状況に責任を感じ、作り上げようとする気持ちが高まっていた。

(3) 意図的なグループで和の文化の魅力が伝わる言葉を共有する。(手立て③)

和の文化についてそれぞれ伝えたいことが違ったことから、自分の伝えたい和の文化を一つ決め、自分が魅力だと思うポイントについて解説文を書いた。資料2に示した三つを書くように伝えることで、和の文化と向き合い、どんなところが魅力なのか考えることができていた。ここでは、「魅力が『宝物』だ」とい

- ① どうして選んだのか
- ② 「宝物」の説明
- ③ 選んだもののどこが「宝物」なのか
「宝物」だと思う理由

【資料2 解説文の柱立て】

う児童の言葉から、和の文化の魅力を「宝物」と呼んでいる。文章にしたことから、自分の「宝物」だと思う部分がはっきりとしてきた。グループ編成では、児童一人一人とコミュニケーションを取りながら、大切にしたい「宝物」が近いグループごとに分けて、「宝物」が伝わる言葉について考えた。例えば和菓子の中でもたいやきや、大福など、選ぶものは様々であった。そして、味、見た目、食感などを魅力として伝えたいグループに分



【資料3「味」を「宝物」とするグループの言葉出し】

かれた。グループごとに、自分の思う味というカテゴリーにはどのような言葉があるのかICT機器を用いて言葉を出し合った。ICT機器を用いて考えることで、それぞれ相手の考えた言葉に目を通しながら、自分なりに考えたことを反映させて考えていくことができた。「味」にも「辛い」や「甘い」「甘辛い」などの言葉があった。それぞれ同じカテゴリーでも似ているグループで言葉出しを行ったことで、それぞれの味に対するイメージを確認することができた。(資料3)

(4) 考えがうまくまとまらず悩む児童や、言葉の組み合わせに困る児童の困り感に対して、話し合いの視点到注している児童や、多様な考えを受け入れ、自分の考えに生かしている児童を出会わせる。(手立て④)

ポスターを作るにあたって目を引くことができるよう、タウン誌を作った経験を生かして、キャッチコピーを入れることとなった。この単元では、個々でキャッチコピーを作り上げていく。今回は作る前に、言葉出しをグループごとに行っていたこともあり、伝えたい言葉が多くある状態であった。どんな言葉が自分の「宝物」にふさわしいか、個人で考えたキャッチコピーをグループで交流し、自分の「宝物」が伝わるか話し合った。(資料4)話し合う視点には、初めに児童がキャッチコピーの大事なポイントを「短い」「まとまりがある」「気になる」とまとめていたことから、それらを視点として話し合うように伝えた。相手の考えを聞きながら、自分の表現したいこともあり、入れたい言葉が多くなってしま

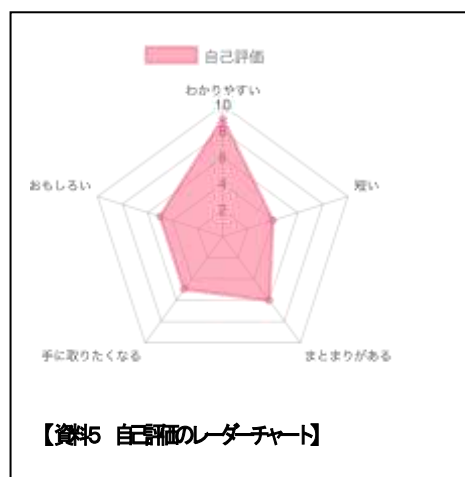
ったことで悩んでいる児童の様子があった。そこで、比喻表現を使い「気になる」言葉を扱おうとするグループの考えを取り上げ、直接的で分かりやすいもののよさもあるが、「気になる」ものには、少し目を引くような言葉の組み合わせ方もあることを確認した。他の子から意見をもらってから、初めに考えたキャッチコピーを変えた児童には、どうしてそのように変更したのか尋ねると、「自分の考えた言葉よりも相手に伝わると思ったから。」と話す姿があった。理由を大切にもって自分の伝えたい「宝物」と向き合っている姿があった。相手の考えを聞きながらもなかなか受け入れることが難しい様子があったが、自分の考えに対して相手がどのように考えたのか、気になって聞いている様子であった(資料4)。

- C1 「書道の文化のよさを伝えたい。書道をすることは、心が落ち着くことにもつながるし、字を整えて書くことは日本の素敵な文化だと思う。あと、筆のよさもあるよ。筆の太さとかによって書き心地とか全然違うんだよ。」
- C2 「それを全部入れると長くなっちゃうよ。」
- C3 「短くした方が見やすいよね。特に伝えたいことは何？」
- C1 「決められないよ。でも、「美しい」って言葉を入れたいな。整えて書くことがよさだから。」
- C2 「何が美しいのか分かるように「自分の字」って入れるのはどうかな。」
- C1 「「自分の字を美しくしよう」にしようかな」
- C2 「今自分の字が美しいって思ってる人は手に取らないよ。」

【資料4】 互いのキャッチコピーについて話し合う様子

(5) 自分の考えた言葉の組み合わせについてレーダーチャートにして自分なりの評価をした後に、相手からの評価を聞いて、客観的な意見をもらう場を設定する。(手立て⑤)

ポスター完成後に、自己評価をした。話し合う時の視点と同じ、「短い」「まとまりがある」「気になる」に加え、「分かりやすい」ことや「伝わりやすい」という視点も大事であるという児童らの意見から、五つの視点をもってレーダーチャートで評価した(資料5)。児童たちは、自分のポスターには何が足りないのか、視覚的に捉えていた。資料4の児童は、「いろいろな情報を入れたことから、分かりやすく表すことができているが、その分、逆に長くなってしまった」と客観的に自己評価していることが分かる。その後、



【資料5 自己評価のレーダーチャート】

その後、カテゴリー別のグループではなく、お互いの「宝物」の内容を知らないメンバーでグループを組み直し、相手がどのようなことを「宝物」としているか分からない状態で評価をし合った。評価の視点は、自己評価のときと同様である。そこでは、自分が伝わると思っていたのに伝わらないことに驚く様子があった。ポスターにしてから、自分のキャッチコピーが長いことに気づく児童もいた。客観的な評価をもらうことで、「作り直したい」とつぶやく姿もあった。評価し合うことは、自分が表現したいと熟考した部分を相手のポスターに照らし合わせながら考えることにもつながっていたことが、ポスターに載せる写真やイラスト選びの場面で見られた。自己評価を相互評価の前に取り入れたことで、自分のポスターに対する捉えと、相手の捉えの違いに気付くことにつながった。

5 成果と今後の課題

(1) 仮説1に対する手立て①の検証

体験する前に、知識をつけてから取り組むことで、より体験にも関心をもって取り組む児童が多くいたように思った。教科書に載っている和菓子を見るよりも、実物を見ると、「きれい」「食べるのがもったいない。」とうっとりした笑みで眺める様子があった。写真でなく、実際に自分が食べるものが目の前にあるということがとても印象的であった様子である。和菓子について家での体験を話す児童や、「もっと調べたい」と和菓子の歴史を調べる児童もいた。このように興味を持ち、主体的に活動する児童の姿があった。また、お皿作りをする中で、柄をつけることの難しさや、柄があることで華やかになることを知ることで、和の文化の中でも着物の柄に視点を置いて調べたいと考える児童もいた。紙すき体験では、難しさを感じる児童の多くが職人の技に注目し、職人の技そのものが、和の文化の魅力であると、体験を終えた後の振り返りに記述が見られた。これらのことから、仮説1に対する手立て①は、学習を進めていく上での意欲へとつながったと考える。

(2) 仮説2に対する手立て②③④の検証

これまで、それぞれ個人で考えていたキャッチコピーであったが、全体で一つのキャッチコピーを考える中で、周りの友達の考えを取り入れながら、一つのキャッチコピーを作ろうとする姿が見られた。相手の考えのよさや取り入れたい部分をお互いに話し合いながら進めることができた。同じカテゴリーごとのメンバーで言葉出しを行うことで、「宝物」に対して、自分では思いつかなかった言葉にも出会うことができ、自分のキャッチコピーを作る際に、言葉の幅を広げていた。互いに視点を気にかけて、キャッチコピーに対する悩みや思いを話していた。周りの友達の意見をそのまま採用するのではなく、自分の思いも乗せたキャッチコピーとなるように、話し合いを行うことができていた。児童の振り返りに「短くまとまりのあるキャッチコピーができた。」と記述があったことから、視点を意識して話していたと考えられる。このことから、仮説2に対する手立て②③④は有効であったと考える。

(3) 仮説3に対する手立て⑤の検証

相互評価をし、自分のポスターに対する評価をもらうことで、さらによいものを作り上げたい気持ちから「もう一回イラストを変えて作り直したい。」と振り返りに記述する児童の姿があった。イラストを変えたい理由を問かけると、グループの児童に、「宝物」に見合うイラストについてアドバイスをもらったからだと話していた。レーダーチャートで自己評価したものと、相手からのアドバイスを受けた後では、自分の足りなかった部分や良かった点を改めて見直すことができていた。このような相手の考えを取り入れ、自分の考えへと生かそうとしている様子から仮説3に対する手立て⑤は有効であったと考える。

(4) 課題

実践を通して、話し合いには、相手について知ることも重要であることが分かった。誰から話そうか、といったところから迷い、様子を伺いながら話す様子であった。グループの中でどのような役割を担いながら話すのか知っておくことで、話し合いを少しでも円滑に進めることができたのではないかと考える。自分の考えや相手の考えに対して柔軟に考えるには相手との関係性も大きく関係してくることから、仮説2で挙げた「自分とは異なる考えへの抵抗感が減り、相手の考えに寄り添いながら受け入れること」につなげるためには、これらの手立てでは不十分であったことが分かった。話し合うことに慣れ、お互いの考えに寄り添う児童が増え、多くの子が周りの児童との関わりに対して、思いを巡らせ、高め合っていくことができるように、これからも、話し合いを継続し、お互いの話し方や考えに触れ合う時間を意図的に確保していきたい。